



ごあんない

太宰府天満宮

御祭神 菅原道真公

由来

太宰府天満宮は、菅原道真公(菅公)の御墓所の上に社殿を造営して、その神霊を奉祀する神社で、学問の神、誠心の神として世の崇敬を集めている。

延喜三年(九〇三)二月二十五日、菅公は大宰府の南館(覆社)において清らかな御生涯を終えられた。その後、御遺骸を牛車に乗せて進んだところ、間もなくその牛が伏して動かなくなった。これは、菅公の御心によるものであろうとその聖地に御遺骸を葬った。京より追従した、門弟味酒安行は延喜五年ここに墓所と神殿を創建、次いで左大臣藤原仲平は勅を奉じて大宰府に下つて造営を進め、延喜十九年に御社殿を建立した。

醍醐天皇は大いに菅公の生前の忠誠を追想されて延長元年(九二三)にもとの官職に戻された。そして、一条天皇の正暦四年(九九三)には正一位左大臣、更に太政大臣を贈られ、天満大自在天神(天神さま)と崇められた。その後、何度も勅使の下向があり、朝廷の特別な崇敬をうける二十二社に準せられた。

明治四年(二八七二)、国幣小社に、同十五年には官幣小社、同二十八年には官幣中社に社格を進められ、天神信仰の聖地として年間六五〇万余の参拝があり、日本全国より尊崇を集めている。

御祭神の事蹟

菅原家の先祖は、出雲臣の祖神とされた天穗日命であり、その十四世野見宿禰公の子孫で土師氏を称していたが、桓武天皇の御代に菅原の姓を名のりようになった。菅公の御父は足善公といひ、御母は大伴氏の出身で、承和十二年(八四五)乙丑六月二十五日に京都の菅原院にて御生誕、幼名を「阿呼」又は「吉祥丸」といわれた。

幼少の頃より学問を好み詩歌にもすぐれ、五歳の時に庭前の梅花を見て

うつくしや紅の色なる梅の花

あこが顔にもつげたくぞある

と和歌を詠まれ、十一歳の時には「月夜に梅花を見る」の詩を作られた。

二十三歳で文章博士となられ、四十二歳の時に讃岐守として四年間の地方官生活を送られ、名国司として領民に慕われた。帰京後は宇多天皇の理想政治のもとで信任を受け藏人頭に任命され、

五十五歳の時には右大臣にまで昇進された。更に昌泰四年(九一三)正月七日、五十七歳で従二位を授かつたが時の左大臣藤原時平の讒言(事実をいつわり、他人を悪く言うこと)により同月二十五日大宰権帥に左遷させられた。

二月一日の京都御出発に際して紅梅殿の梅に別れを惜しまれ、

東風吹かは匂ひおこせよ梅の花

あるじなしとて春な忘れそ

と詠せられ、その梅が菅公を慕って飛来したのが御本殿前の「飛梅」であると伝えられている。

菅公は大宰府へ下向の途すがら、河内国土師の里(藤井寺市)、通明寺の叔母君繼寿尼に別れを告げられ、瀬戸内海の海路を使つて九州に至り、三月月上旬頃大宰府にお着きになられた。しかし、政務の実権はなく、大宰府の配所(覆社)を一步も門外に出られずひたすら謹慎の御生活を送られた。そのような辛い配所においても天を恨まず、人を憎まず、国家の繁栄と皇室の御安泰を祈られた。九月十日恩賜の御衣を捧げて

去年の今夜 清涼に侍す

秋思の詩篇 独り断腸

恩賜の御衣 今此に在り

捧持して 毎日茶香を拝す

と詠まれたことは広く知られるところである。いつの日か無実の罪が晴れることを願つておられたが、延喜三年(九〇三)二月二十五日、再び京の地を踏むことなく御年五十九歳で亡くなられた。

菅公の御事蹟は、我が国の文化興隆の上に大きなものがある。菅公の建議によつて遣唐使が廃止され、以後我が国独自の文化が陸々として興つたことはよく知られている。また、学者として三代実録の編集にかかわり、「類聚国史」を作られ、また詩人としては「菅家文章」「菅家後集」の詩集に、公のすぐれた才能を今日に伝えている。